

はじける ころ

vol. 17
2007年9月号

人権の宝島：ひとつひとつの活動を
進路学習（生き方学習）につないで…
「わくわくする授業を体験！」第四中学校での
公立高校体験授業……………1-2
夏季合同一日研修会レポート……………3-4
エッセイ：いっぱい、いっぱい かわのひでただ……………5-6
箕面らしい人権教育の推進を 平沢安政……………7



げんげの：「げんげ(紫雪草)」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。

げんげののぺえど

●写真募集！●子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。

みのおから世界へ！ 人権文化の花束を！

箕面らしい人権教育の推進を

平沢安政 (大阪大学)

子どもに対するいじめや虐待の深刻化に象徴されるように、日本社会の人権状況は多くの課題を抱えています。そのため、とりわけ学校園において人権教育を総合的に推進することがますます重要になっており、そのような取り組みを後押しする追い風も吹いています。国際的に見ると、例えば「人権教育のための国連10年」(1995年～2004年)を通じて人権教育の実践は大きく広がり、国連決議にもとづく「人権教育のための世界プログラム」(2005年～)は、世界中に豊かな人権文化を育むための教育を積極的に推進することを、引き続き呼びかけています。

日本の人権教育は、「差別の現実から深く学ぶ」視点を大切にする同和教育を中心に発展してきましたが、1990年代以降、日本の人権教育関係者は国連をはじめ、諸外国の人権教育の理論・実践から多くのことを学び、人権教育のすそ野を大きく広げてきました。その結果、人権総合学習の実践も広がり、学校全体で人権教育を組織的に展開することにより、「人権教育学校」をつくらうとする意欲的な取り組みも増えつつあります。文科省に設置された「人権教育の指導方法等の在り方に関する研究協力者会議」が2006年1月に出した「第二次とりまとめ」は、学校園で人権教育を推進するための理論的な枠組みや具体的なアイデアを示しており、まさに今は人権教育推進の正念場を迎えていると言っても過言ではあ

りません。

このような機会を有効に活用できるかどうかは、ひとえに人権教育を推進しようとする教育委員会や学校現場の意欲と組織的な取り組みにかかっています。これまで蓄積されてきた人権に関わるさまざまな教育運動(同和教育、男女共生教育、国際理解教育、多文化教育、開発教育、グローバル教育、地球市民教育、環境教育など)の成果と到達点を踏まえながら、地域コミュニティや社会の多様な資源を活用して、人権教育をいっそう魅力的に展開することが重要です。

その時に大切にしたい視点のひとつが、「箕面らしさ」の追求です。人権教育の推進は「いつでも、どこでも」必要ですが、その具体的な姿・形は「いつでも、どこでも」同じであっては魅力半減です。すべての子どもたちの自尊感情育成と自己実現の支援、多様な他者との豊かな出会いと関係づくり、社会の現実に対して積極的に関与しようとする姿勢の育成、自然や地球環境との共生的な生き方の追求など、今日の人権教育が取り組もうとしている共通課題を念頭に置きながら、それぞれの学校園が「いま、ここで」直面している現実と向き合うことを通じて、特色ある人権教育の創造に取り組んでいただきたいと思います。

人権教育推進会議情報誌『はじける ころ』

発行 箕面市人権教育推進会議

箕面市教育委員会

人権教育課 TEL072-724-6921 FAX072-724-6010

e-mail: edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成19年(2007年)9月

人権教育推進会議委員

平沢安政、守婦朋子、小関麻沙好、平沢清美、河野秀忠、小林和幸、安東由紀子、森木綿子、谷口俊美、昌元真己、福永茂、田中はるみ、細井末子、渡辺由美、赤川隆洋、竹綱珠衣、倉橋利治、平林和男、仲野 公、森田雅彦、奥山 勉、井上隆志、稲野公一、若狭周二、森井園夫、向井裕彦、笹川実千代、真鍋あけみ、中村信隆、長沢 均、水野賢治、千葉重紀子、津田善寿、黒崎敏孝、小西敏広、黒田正記、大浜訓子、吉田卓司、辻 広志 中井正美、森 和則、桂木洋一

「はじけるころ」は教職員・PTA運営委員に配布しています。公共施設においています。
公開ホームページ: <http://www2.city.minoh.osaka.jp/EDUJINKEN/JINKEN/jinken.html>

「わくわくわくする授業を体験！」

ひとつひとつの活動を進路学習(生き方学習)につないで…。6月6日(水)・13日(水)

第四中学校での公立高校体験授業

6月13日(水) 5時間目に10教室に分かれて、高校の先生による授業が始まりました。先生も生徒も緊張した中にも、いろいろな発見があり、参観した私たちも「わくわく」しました。

その後、校長先生から四中の取り組みについて思いを込めて話していただきました。中学校では、「進路保障は、人権教育の総和」と言われています。それは、9年間の義務教育の中で、社会に出るための大きな節目であり、子どもたち一人ひとりがどのように進路を考えて選ぶのか、「自分自身の生き方に関わる大事な選択」という意味をもっています。

また、一方で「高校中退」が大きく社会問題化しています。四中では、中学校卒業時に一人ひとりがどのように進路を考えていくのか子どもたちにできるだけ中学卒業後の生き方を考える時間(進路学習)として、1年生の時から視野に入れ、行事や職業体験に取り組んでいます。平成17年度からは、1・2年生にも

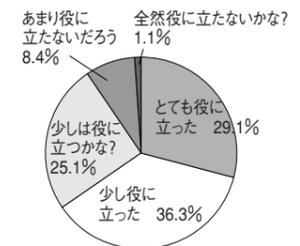


進路説明会を実施しているということでした。これまでも、「先輩経験談」として卒業生から話を聞いたり、高等学校の校長先生などを学校に招き、高等学校の説明を保護者と共に聞いたり、各高校で行われる学校見学会に行くなど、できるだけ「高校」をイメージできるような取り組みを続けていますが、昨年度からの「公立高校体験授業」は、さらに一歩踏み込んだ取り組みで、高校の先生が中学校に向き、中学生が直接授業を体験できる機会となっています。

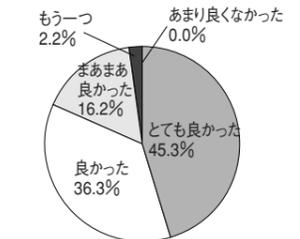
もちろん中学卒業後の進路は全員が「高校」に進学するものではありません。「高校」以外の学校に進む場合もあり、就職を希望する場合もあります。しかしながら「高校」を次の進路に選択する生徒が多い中、今回のような授業を体験して、「高校」が身近になると、進路選択に対して不安を感じていたり、漠然と「高校」について考えていた生徒が、「自己実現」をめざした最初の「自己選択」である進路について具体的に考えていく取り組みであると思います。

高校名	講座名	講師名(場所)	内容
箕面高校 全日制普通科 国際教養科	世界史・地理	田上 先生 (3-1)	フォトランゲージで世界各地の人々の様子を見る
	英語	藤山 先生 (3-2)	英語の発音を楽しむ学ぶ
	生物	増田 先生 (3-3)	おもしろ科学の余談話
箕面東高校 多部制単位制普通科 (クリエイティブスクール)	レクリエーション スポーツ	松本 先生 (体育館)	キンボールを教材に新しいスポーツの紹介(13日のみ)
	ビジュアル イングリッシュ	前田・西村先生 (視聴覚室)	視聴覚教材を見た後で、プリントの問題をやっていく
北千里高校 全日制普通科	Shall will enjoy communication?	今岡 先生 (3-4)	ペアでの英語、話すことを中心としたゲーム、ライティング活動など
	薬物乱用防止教室 (保健)	橋本 先生 (3-5)	薬物がもつ2つの顔について知る
	デジタルって何や (美術)	上野 先生 (少人数6)	コピーの仕方
豊島高校 全日制普通科 総合選択制	文字とことば —甲骨文字	戸田 先生 (少人数2)	文字(漢字)のルーツとその意義について
	ライフスタディ (家庭科)	山本 先生 (少人数3)	ゲーム「サイレントトーク」 障害者の気持ちを理解する

体験授業全体を通してどうでしたか？



進路を考えていく上で、今回の体験授業は役に立ちましたか？



公立高校体験授業に参加して

生物「生命の不思議、からだの不思議」なぜ・なにに挑戦」の授業では、違うように見えるが、実際に物差しで測ると同じ長さや大きさである図や、ひとつの絵が二通りに見えるフィッシャーのだまし絵から、目の錯覚について学びました。身近なもの、当たり前なのに「なぜ？」と疑問を持つこと、見かけに惑わされないこと、違いに気づく習慣を作ることが大切だと感じました。実験を通して自分の目で確かめることを教えてくれた高校時代の恩師を思い出しました。そのことは、いまでも私の人生の指針となっています。

また、「文字とことば—甲骨文字—」の授業では、漢字のルーツとしての甲骨文字の面白さに触れることができました。できあがった漢字の姿だけを見るのではなく、ルーツを探ると本質が理解できるというメッセージを受け取りました。

授業参観のあとで校長先生から、「四中三訓は、生徒たちといっしょに考えたこと、言葉が浸透することで共通言語ができ、そこから意識が高まり行動へとながら」というお話を伺いました。その意味でも、それぞれの生徒が体験授業で学んだ言葉や視点を今後の成長につなげてほしいと思いました。

人権教育推進会議市民委員 守帰 朋子

フォトランゲージ、何枚かの写真から、その国がどこかを当てるクイズ。四中の公立高校体験授業の一コマです。科目は国際理解(社会)。

写真は町の風景、お祈りをしている人、川のある風景などでした。写真の中にヒントが隠されているのですが、意外と難しかったです。子どもたちも、頭をつき合わせて、一所懸命に考えていました。様々な情報が手に入りやすい時代ではあるけれど、知っているつもりでも、実はきちんと知らないことの多さを実感しました。

授業の最初、先生が「今までに行ったことのある国をあげて



ください」と子どもたちに質問しました。中国、アメリカ、韓国など5カ国でした。続いて、「192」この数字の意味するものなんでしょうか?という質問。答えは、世界の国の数。クイズを通して、まだまだ知らない国、民族がたくさんあることを子どもたちは感じているようでした。

後半、世界の貧富の差についてのクイズがありました。1960年代と比較して世界の貧富の差はどのくらい変化していると思いますか?と言う問いに、子どもたちのほとんどが「広がっている」と答えていました。正解でした。

クイズの正解率に応じて子どもたちにチョコレートのごほうびがありました。たくさんもらったグループ、5人で一個だけのグループ。どうするのかなと思っていると、子どもたちはチョコレートをみんなまで分け合っていました。ごく自然に分け合う子どもたちの姿をみているうちに、世界で今、行われている争いももしかしたらとても簡単などころに解決の糸口があるのかなと思えました。

参観のあとで、校長先生にお忙しい中、お話をする時間を設けていただきました。校長先生の「学力指導が人権教育にもつながると考えています。」のお話が、今、受けてきた国際理解の授業とつながるように思いました。

参観を通して、改めて「知る」ことの大切さを思い出しました。

人権教育推進会議市民委員 昌元 真己

高校進学を意識して

「学力保障は人権保障である。社会的自立を養うのが学習であり、切り口はいろいろとあるが、進路指導はとて大切である。この出会いが高校選択のひとつとなればよい。生徒がまだ夢を語るこの時期に高校と関係を持ち、自分と友だちの進路を考える一日にしたい」と思い、昨年からは始まった取り組みである。」と、屋代校長先生の話。

四中の進路指導に取り組む姿勢は「その通り」と私も共感できました。しかし、新学区制度になり従来より倍の選択肢ができた今、ひとりの生徒が高校4校から4講座の授業を体験するのは中途半端な気がして「進路指導をやっているぞ」というような取り組みだったらどうしようかと心配しながら参観しました。



生徒の感想

○とても良い経験になりました。高校ではこんな授業をやっているんだなあと思いました。進路について少しずつ考えていきたいです。

○思っていたより楽しかったです。高校ってとってても堅苦しくて、あまり楽しくなさそうな印象が一気に吹き飛びました。たった4時間の中で、あれだけのことを知れたのはとても有意義でした。ありがとうございました。

○楽しい授業をありがとうございました。「こうなる理由」とかも詳しく説明してくださり、よくわかって授業が楽しく思えました。先生自体がもしろく、はやく高校へ行きたいって思えました。

参観した国際理解の授業はたいへん楽しく、この続きは高校で学びたいと思えました。この取り組みを生徒たちはどう感じているのか知りたかったので四中のホームページを開きました。進路コーナー・お便りなどを観ると、内容がとても充実しており、「学校が持っているだけの情報を全生徒に提供し、進路と一緒に考えていこう」とする姿勢が感じ取れ、スゴイ!と感動しました。

他の中学校の生徒も進路に関する情報がほしいときは、四中のホームページを参考にしたいかと思えます。また、今回の取り組みの事後アンケート結果も掲載されています。多くの生徒たちは、「よかったです」と思ったようでした。

この新しい取り組みが、学校にも生徒たちにも「出口が入り口」の卒業時に良い結果をもたらしてくれる活力源になったらいいなと思います。

人権教育推進会議市民委員 小関麻沙好

2007年度 夏季合同一日研 レポート

平成19年(2007年)8月1日(水)

10:00～16:00

箕面市文化交流センター8階・地階会議室

箕面市人権教育研究会(市人研)・箕面市在日外国人教育研究会(市外教)・箕面市教育研究会(市教研)合同で主催して開催されました。教職員や保護者などのべ約340人が参加しました。箕面市人権教育推進会議としても今年度は研修会全体の共催として、各分科会に参加しました。新しい教職員がここ数年たくさん各校に赴任していきま。そこで今年度の研修会は、今まで培ってきた箕面市の人権教育の取り組みを若い世代の教職員に伝えていく場になっていくこともひとつの目的としています。どの分科会でも若い教職員の参加があり、2学期以降の各校園での実践に生かしていけることを期待しています。

■分科会のテーマと実践報告・講師■

第1分科会 テーマ:子どもと子どもをつなぐ集団づくり(子どもの育ち専門部企画)

実践報告 「つながることが力になる ～2年生のとりのくみより～」

報告者 持田里香さん(豊城南小学校)

ワークショップ「思いをひきだし、子どもと子どもをつなぐシェアリング」

報告者 馬場ゆかりさん(せいなん幼稚園)

助言者 積田洋一さん(豊能町立光風台小学校)

第2分科会 テーマ:新しい部落問題の展開(人権部落問題学習専門部企画)

実践報告 「暮らしづくり 中小 2007」

報告者 佐藤秀昭さん(中小学校)

実践報告 「地域に飛び込め!! ～みんなで地域の祭りに～」

報告者 中井紀代美さん・青本真沙美さん(第二中学校)

助言者 主原照昌さん(第六中学校)

第3分科会 テーマ:男女共生ってなに?(共生の教育専門部企画)

講演 尾澤のみ子さん(第六中学校)

第4分科会 テーマ:寝屋川市の小中一貫教育で進める学力保障(市教研企画)

報告者 清瀬林太郎さん(寝屋川市立明和小学校)

第5分科会 テーマ:在日の視点から多文化共生を考える(市外教企画)

実践報告 「朝鮮の文化にふれてみよう」

報告者 関野真弓さん(萱野東小学校)

ゲスト 金知花(キムチファ)さん(大阪市立中本小学校)

コーディネーター 寺本耕二さん(第二中学校)

第6分科会 テーマ:共に学び共に育つ教育を大切にして(市人権研・市外教事務局企画)

実践報告 「天国に行ったかな、ブチ」

報告者 谷川京さん・沖田信子さん・大形宏紀さん(南小学校)

実践報告 「人権サークル・ハンドインハンドのとりのくみ」(第五中学校)

報告者 倉橋光代さん(第五中学校)

助言者 堀 智晴さん(大阪市立大学)



「共に学び共に育つ教育を大切にして」に参加して
障害の有無に関わらず児童・生徒が、「共に学び」「共に育ち」「共に生きる」環境づくり、お互いの理解を深めていくための教育実践として南小学校、第五中学校から報告がありました。特別支援教育が箕面市の小中学校でも始まっていることで、学校現場から児童・生徒にどのような影響を受けているのか、私にはとても関心がありました。
今回報告のあった各校には児童・生徒との日頃からの極め細やかな指導や児童・生徒自らが互いの違いに気付くことに対し、どのように今後の行動に繋げていくかを考える場を設けていることが伝わってきました。
しかしながら、現状はどうでしょう。今年の春に卒業の障害児学級に在籍していた6年生の中には進路を地元の中学校ではなく、特別支援学校(養護学校)を選択されています。特別支援学校(養護学校)を全面的に否定するわけではありませんが、今まで保育所や小学校を通じて6年間地域の児童と共に育ってきたこと、そのことによって地域の児童達の、互いの理解が、学校を分けられることによって、互いに助け合って生きる力が弱まっていくのではないのでしょうか。個別に対する教育の大切さは必要なのだが、一人ひとりが学び、育つにはいろいろな違いのある仲間が不可欠です。
公立の高等学校の門が障害にある生徒達に少しずつ開いています。助言者役の堀先生がおっしゃられていたように、「学校の先生が地域で自立しようとしている障害者にもっと出逢い、今在籍している障害のある児童・生徒にどうアプローチすべきかを考えるべき」との言葉どおりです。一人ひとりの人間の生き様に幼少期からの教育が与える影響はとても大きい。学校と地域が連携をとって今後もしっかりと取り組まなければ、と逆に私自身も強く感じました。
人権教育推進会議市民委員 安東 由紀子

ワークショップは、①「朝起きて、違う性になってたら？」と②「気に入らん異性」について。①では家事からの解放、帰宅時間の制約が少ない等が挙げられ、抱えている問題が垣間見えました。②では、10年前のデータと変化がないことから、その理由を考えました。「気に入らん異性」の要素には、威圧的と優柔不断という「男らしさ」の表裏のよなものもあり、それは、同時に「気に入らん同性」の要素ともなりえることから、これは人間としてのありようが問われる問題だと考えさせられました。

チカン撲滅ポスターからは、制作者のものの方、被害者への視線、批判を受けるまでわからないという問題意識の欠如などが見えてきました。ひとりひとりがチェック機能を持たないと、セクシュアルハラスメントの温床になる環境づくりに加担してしまう危険性もあるわけで、「傍観者も加害者」という言葉を思い出しました。「違う視点で見たらどうなるか」「相手の立場に立てばどうなるか」を問い続け、「おかしなものをおかしい」と気づく感性を育てておられる授業風景を是非見学したいと思いました。

「共に学び共に育つ教育を大切にして」に参加して

以前、特別支援教育コーディネーターの先生方にお話うかがいましたが、この分科会で特別支援教育という言葉の理解が、先生方によって異なるという印象を受けました。箕面市では長年、障害児教育に取り組んでおられるので、それを十分活かす教育であってほしいと思います。「共に学び共に育つ環境で育った子どもたちが大人になれば、隔離的な教育のなかで育った人の大きな違いに気づく」というお話がありました。私自身も小学生時代に共に育った経験があるので、子ども時代に、どういう景色のなかで過ごし何を考えるかが、次の世代へ大きな影響を与えていると感じました。

人権教育推進会議市民委員 守帰 朋子

「共に学び共に育つ教育を大切にして」に参加して
ありのままの自分を受け止める

ありのままの自分を受け止めることができなければ、お

互いの気持ちを理解する余裕はありません。話し合いをする際に、自己表現の上手な人や下手な人もいますが、人は誰しも自己を主張したいと思っています。浅いつきあいではなく、どどんぶつかり合い、人の気持ちを深く知り、理解につなげていくことが大切だと思います。全員に理解してもらおうのは困難だと思いますが、その中で気持ちを通じ合う友だちを見つけていくことに意味があると思います。道徳の授業などで南小のようにどどんぶつ話し合いの場を設けてほしいと思います。

また、人権サークル「Hand in Hand」の活動に関心を持って参加する生徒がいて、卒業後も障がいのある人と関わる仕事に携わっている人もいるとお聞きし、素晴らしいことだと思いました。これからも交流の輪を広げてほしいです。
インクルージブ教育へ

インクルージブ教育という初めて聞く言葉でしたが、特別支援教育よりも柔軟性のある教育が特徴で、個別教育のみに走らないで「共に学び共に育つ」ということが大切かというメッセージが伝わってきました。子どもどうしの関わりを大切に障がいのある子どもとそうでない子どもの間でいろいろな問題があり、スムーズにはいかないが、関わることで理解が深まる。20人いれば、20通りの考えがあり、いいか悪いか簡単に判断してはならない。いろんな子どもたちの意見がぶつかり合うことにより、切磋琢磨され人を見る目の実力がつくというお話が印象的でした。私もそのことは実感しており、障がいがあるからといって、腫れ物に触るような対応ではなく、なによりもまわりの子どもたちとの関わりや、経験によって得ることが大きいと思います。また、先生方も個別に問題を抱え込むのではなく、学校全体で取り組んでほしいと思います。

人権教育推進会議委員 森 木綿子

「新しい部落問題学習の展開」に参加して

昔から人権教育を考える中で、部落問題は切り離せないものとなっています。
しかし、まず、人権一人が人として与えられた権利をいかに守り、どうすれば次の世代の子どもたちに現在の状況大人の思いが伝わるのか、と考えなければならぬと思います。

今回、中小学校、箕面第二中学校の部落問題学習の取り組みの目当てが、ほとんど同じように感じました。
「自分を認め、他者との出会いを大切に、地域の中に飛び込み存在を認めてもらい、与えられた自然の恵みに感謝する。」本当にこく当たり前のことが今の社会の中で難しくなっています。

先生方のお話で、「地域との出会いの中で人とのつながりを考えていき、自分の生き方を考えて欲しい。」プラスの思い出を作り、プラスの出会いをすることにより、部落問題をなくす方向につながるのではないかと、という内容が印象的でした。プラスの出会いにより、もっともっと子どもたちの笑顔が咲いてほしいと思いました。

人権教育推進会議市民委員 谷口俊美



